転身　救いは創造主から来るか　人格価値と生命価値

さらに一つの例をあげて、人格価値と生命価値との似て非なるものなることを明らかにしよう。ここに一人ありて盗人に財を奪われんとする場合を考えよ。およそ彼が盗人に対してなすことをうる四つの場合があるであろう。（一）彼は奪われんとする財に著しく恋着を感じながら、盗賊が力強くして自己の及ばざることを知り空しく財を盗賊の奪うにまかせる。（二）彼は奪われんとする財を目標として盗人と格闘する。この二つの場合彼は目標を物に置いているところの利己主義者である。（三）彼は盗賊ごときものに力を屈することを恥辱として盗賊と格闘する。この場合彼の目標は物ではなくして、格闘に堪える自分の生命力である。これを仮に生命中心主義者と名づけておこう。（四）物も力も共に執着するに値せず、自己の人格価値は物と力とを離れて独自なるものと覚りて、これを捨離して彼は盗賊の欲するままに与えようとする。この場合彼は「上衣を奪わんとする者に下衣までも与えんとする」聖者である。彼は人格主義の権化である。およそ（一）より（四）に到るにしたがって彼の価値がしだいに高まっていることが感じられるであろう。その理由を考えてみたい。

（一）の場合の彼は物を目標としながら物を維持するための生命力を欠くものであって論ずるに足りない。彼は人格と生命との涸渇者である。（二）と（三）との場合における彼は共に盗賊との格闘に勝うる生命力をもっている。生命力は物を自己に摂取してそれを自己内容に消化し同化することによってその成長をとげる。それゆえ生命力は物と全然離れて自己を成長さすことはできない。しかし生命力はあくまでも主体であって、物は常に従属であらねばならない。しかるに（二）の場合の彼は従属たるべき物を目標とする点において、主体たるべき生命力を目標とする（三）の場合よりはいっそう価値少なきは当然である。（四）の場合にいたっては、従属たるべき物はもちろん、主体たるべき生命力さえも目標とせられないで捨離せられている。この場合、聖者は盗賊に衣を与えることによってその夜凍え死ぬかもしれないにしても彼の人格はそのために極度の成長に達する。彼は物も生命も共に執着に値せざることを覚って、それらいっさいを執着する者の手にわたして、執着する者の縛られたる心的状態に憐れみを投げかける。彼が生命価値を目的とする限りは、生命の栄養を物の摂取に仰ぐ必要があるから、全然は、物の束縛から脱することができないのであったが、人格価値を目的とする場合には必ずしも栄養を物から仰ぐ必要はない、したがって彼は無上の自由と無上の価値に到達することができるのである。

自己の生命を否定して自己が無上の価値に到達する――もし生命（肉体的生命）が自己の主体であるならば、それを否定することによって自己が価値を獲得するということはいかなる場合にもありうべからざることである。主体の否定によって主体の価値も否定さるべきは必然でなければならない。しかも聖者が生命を否定することによって、時として生命を

肯定する以上に自己の価値を獲得することがあるのは、彼の主体（人格）が、現象生命以上のものであるからである。

多くの人達は自己の主体（人格）を自己の生命と同一視しようとして過誤に陥っている。が、人格は必ずしも生命と同じではない。生命ある者といえども必ずしも人格はない。犬は生命があるけれども人格はない。かく言えば、犬における一個の統一せる生命は、発達の程度もちがい名称を犬格（けんかく）と言うべきかもしれないが、われらの人格に相当するものは犬にもあると言わるる方があるかもしれない。しかし、かく言わるる方は「生命の統一」を「人格」そのものと混同し誤視していられる方である。「人格」は人の主体であるが、「生命」は「人格」の胞（えな）であるからという理由によってのみ、「人格」は生命を捨離してもその成長をとげうる場合があるのである。むろん「人格」はある時期まで「生命」の胞（えな）のうちにあって「生命の統一」と共に成長する。ある時期においては、「生命」の胞（えな）を傷つけることによって「人格」の胎児はその成長を害せられる。かかる場合には「生命」に対する迫害はただちに「人格」に対する迫害でありうる。しかしながら「人格」と「生命」とを混同してはならないのは胎児と胞（えな）とを混同してはならないと同じである。人格は「生命の統一」の奥所にさらにこの世ならぬ美しき「統一」をもって潜んでいる内部の「神聖性」である。それゆえ胎児が胞（えな）を離脱して成長する時期があるように、「人格」は「生命」を超脱して成長する時期があるのである。犬をはじめ、動物は「生命」を超脱して成長する「人格」のごときものをもたない。

世界悪の根因

万物の創造は「無明」をもととし、「自他の分別」と「欠乏」の念に従って、執着相纏縛（てんばく）していよいよ複雑につくられてゆく。執着とは自己のみにて完全なりと意識すること能（あた）わざるため外より自己を補足するものを摂取せんとする欲念である。「執着」は物質的にあらわれて、牽引力となり、精神的にあらわれて意欲となり、生物界にあらわれて、小なる生命を呑噬（どんぜい）して肥え肏（ふと）らんとする生命進化の動向となるのである。

この世界は実に「無明」によって起これる「執着」から成り立っている。この事実を何人も打ち消すことはできない。大は宇宙を運行する天体が秩序整然たる観を呈して運行するのも「執着」（牽引力）によってである。小は物質分子を構成する陰電子が陽電体を中心として旋回するのも「執着」（牽引力）によってである。牽引力がなかったならばこの宇宙は成り立だない。食欲も肉欲も恋愛もいっさいの意欲はすべて執着である。この執着なしに生命の世界は成り立だない。しかも執着あるがゆえにいっさいの罪悪が発生するのである。ここで自分は冒頭に引用した倉田氏の「感想」に立ち戻って考えてみたいと思う。氏の言わるるところによれば、「殺生や、姦淫や、弱肉強食の現象や、善が滅び、悪が栄えるように見える世相や、自然対生命の冷淡な機械的な出来事や、またさまざまな経済的な束縛（二物同時に同所を占（し）むることができない、という約束から生ずるすべての数量的なる限界の意識）等もそれがすでに存在している限りは、それだけの意味があり」「何ものかから、存在を許されておればこそ存在している

のである。聖書的に言わば造り主がよしと見て造ったから存在しているのである」と氏は考えたいのだそうである。氏は著しく造り主を信頼しすぎていられる。詳しく言えば造り主そのものの本質をしらべてみることなしに造り主が造ったものは、必ず造り主がよしと見て造ったに相違ないという宗教的因襲（いんしゅう）観念にとらわれていられるのである。自分が以上思索をつづけてきたところによれば、「造り主」とは「完全円満」なる宇宙の本質の上に浮かんだ「不完全不満足」という錯誤観念（無明）なのである。この錯誤観念のゆえに、精神と物質と相分別すべからざるに分別し、自他一如にして差別すべからざるに差別し、本来完全なるに不完全なりと思いあやまり自己に執し、他を奪わんとし、奪うことあるいは結合することによってのみ大きくなり、本来の「完全なるもの」の域にまで進化せんとするのである。宇宙進化の動向も、男女相結合する性欲も、他の生き物をとって食うところの食欲も、人間の利己主義も、新しき村の人類中心主義さえも、すべてそれらが自己に執し、他を奪いまたは他と結合することによって大きくなろうとする限り、自分はそれらをこの錯誤観念の発現であると解釈せざるをえないのである。しかしてこの世界がこの根本の錯誤観念の発現である限り、この世界には永久に罪悪の発生を根絶することはできないであろうと自分は恐れる。たとい未来において人類の永久平和が招来される時があろうとも、人間の生活が他の生き物の血の上に成り立っているかぎり自分はその人類の平和を「罪なきもの」として祝福することはできない。たといその時、人間は生き物を食わなくなり、無機物から食物を製造して生活しうるとも、人類がその時まで、いかに他の生物を圧迫することによって、その時の優勝の地位を贏（か）ち得たかということを考えてみるならば、人類の勝利の後ろには蹂躙（ふみにじ）られたる多くの生物の血の河がながれていることを知らねばならない。自分はすべての人類に向かって彼らの平和がいかなる最高度に到達しようとも、自己の存在が「無明」に起因している以上、決して罪を犯さないでは生きられないという事実を謙遜に承認することを慫慂（しょうよう）せざるをえない。つくり主の名に隠（かく）れて人類が生存するために犯されたる罪悪になんらかの意義を付そうとする自欺（じぎ）的努力は人類にとって決して名誉であると言うことはできない。

この最後の一節において「自分はすべての人類に向かって彼らの平和がいかなる最高度に到達しようとも、自己の存在が『無明』に起因している以上、決して罪を犯さないでは生きられないことを謙遜に承認することを慫慂（しょうよう）せざるをえない。つくり主の名にかくれて人類が生存するために犯されたる罪悪になんらかの意義を付そうとする自欺的努力は人類にとって決して名誉であると言うことはできない」と言ったわたしはまだ現在の「生長の家」のごとき「無明（まよい）本来無し」の境地に到達していない。自分の実相はすでに円満完全なる仏性、神性なりとの思想に到達しながら、「無明（まよい）」もまた存在してこの世に暴力を揮（ふる）っていると思っていたことは明らかである。だからわたしは本当に心から明るくなれなかった。わたしの暗い人生観はわたしを常に不健康にしていた。始終わたしは神経衰弱で苦しみ慢性下痢に悩んでいた。そのころ、それは次に述べるが、高野太吉氏の「抵抗養生論」によって病

念が一転してともかく、慢性下痢だけが救われたのであった。かくのごとき思想のもとにわたしはこの現実界の創造主を国常立尊と称するごとき円満完全なる叡智者ではないとして否定してしまった。そしてその思想を芸術的に表現するためにわたしはセッセと『神を審判く』と題する小説を書き始めた。

関東大震災に逢う

五

「傍若無人に内心のまにまに言行した幼児がしだいに成長するにつれて、自分の内心に忠実すぎることが社会的におもしろからぬ結果をきたすことを知るとき、自分の内心への忠実さを固守せず、相手の気に入るような態度をとろうとするのにも二種ある。一つはそうすることが自分の利益になるのゆえをもってそうするのである。も一つは、相手をただちに否定したり、ただちにその口を縫ってしまうことが愛に背くのゆえをもってそうするのである。利益のために自己内心への忠実さを捨てることは人格の高潔さを捨てることである。それは人格の低卑の徴候であり、その尊厳からの墜落である。多くの世開並のいわゆる『融通のきく』人間はたいてい利益のために自己の尊厳を失墜したものであるからいうに足りない。かくのごとき人格には自分はむしろいかなる場合にも自己の内心を欺かざるような人格の高さに達するために性格を純粋にするように慫慂せざるをえない。しかし、愛深きゆえに自分を主張することをしばらくさし控えるごとき人格に対する時、自分はその人格の包摂する広々さに敬意をはらう。そして現在の自分のごとき『義』に拘泥しすぎた狭くるしさを羞かしく思わないことはむずかしい。『義』は『愛』のために王位を譲ってその前に跪くことが至当であるように思う。ヨハネはキリストの靴の紐を結ばねばならない。いかなる『虚偽』をも許容せざる四角四面な善人が、いよいよ義しければいよいよ世間から遠ざかりて、世間を救済することもどうすることもできずに孤居しなければならないのは、その善人の人格が高さばかりあって広びろさがないためである。人格の高さを不足するものはまずその高さまでのぼって行かねばならないが、高さのみあって、広びろさのなき者は、しばらくその『義』の高地から広びろしい『愛』の平原まで降りて行かなければならない。自分のごときは特にこのごろその必要を感ずる。……」

こうわたしは書いて、善にこだわり、ひっかかって、自己自身が無力となって誰をも救うことができなくなった自分を鞭撻しつつさらに肉食問題について、次のごとく述べている。

――

「今自分はあらゆる方面において実に窮屈なる生活の絶頂に立っていることを感ずる。この狭隘さから自分は脱却しなければならない。これを脱却することによってのみ自分の人格の広さにおける生長がありうるのである。自分は『殺生』を罪悪だと信じていた。しかし、自分は少なくも『殺生』することなしには生きることはできなかった。一個の生命は他の多くの生命を共食いすることなしには生きることはできない明らかな事実を見るとき、自分は、菜食することをすら生命

の共食いとして恐れなくてはならない。しかし自分はいっさいの『殺生』をやめようとする時自分の生命を殺さなければならない。そして自分を殺すこともまた『殺生』であるがゆえに、自分はもはやいかに為すべきかすべを知らないのである。かかる場合、自分の生命を殺すところの『殺生』を避けるためにできるだけ殺生らしくない『殺生』をなすことによって生命をつながなければならなかった。すなわちできるだけ残忍な感じのする、血の滲んでいるような肉食を避け、したがって獣鳥の肉はまったく喰わず、魚肉といえども、なまなましい感じのする刺身のごときは箸をとらず、なるべく性質と姿を変えたるごとき料理において、それも少量食べたのである。すると、いっさいの動物食品は――自分の食餌の習慣にもとづくゆえであるか、それは知らない――自分に一種の嫌悪の感を与えるようになってしまったのである。そのころ自分は浅草松葉町に住んでいてあの関東大震火災に会ったのである。自分は避難した先で恵まれた一片のパンを、その中にバターが這入っているというゆえをもって食べなかった。バターが精進中の自分に嫌悪されたのは、それは幼き牛からの掠奪であるからである。その時は自分は気づかなかったが、そのために先方の感情をいちじるしく害したのだったそうである。それはその時一緒に避難していた義姉からの手紙によって後になって自分は知った。義姉自身さえ、自分のその時の行為を「わがまま」であるとその手紙の中で非難して来ているのである――かかる災厄の場合に食べ物の選択などをかれこれ言うのはわがままである――と彼女は書いているのである。自分はこの『わがまま』という非難に対してはそのままには素直に承服することはできない、しかし先方がせっかくわれわれに恵もうとした食物を拒絶された場合にある不快を感ずるということには同情しうる。自分は幼き牛からバターを掠奪しないことにおいて、牛に対しては愛深かったが、せっかくの恵みを退けて好意を無視した点において、人間に対しては愛がなかったと言いうるのである。そして自分は自分のその時の態度が、どこから叩いてみても『わがまま』に見えないほどには磨きのかかったものでなかったということにも首肯する。そして恥じる。

その時以来、自分は余所で食事をよばれる時、獣鳥魚肉の料理を出される時、犠牲になっている獣鳥魚に対する憐愍と、無下にそれを退ける場合の相手の供養に対する思い遣りのなさとの間に板挟みになっていた。そのころから自分はある場合は恵まれたものはなんでも食べたが、ある場合は恵まれた獣鳥魚肉を拒絶した。すなわちある場合は、相手の供養し下さる心への愛が打ち勝ったが、ある場合には犠牲になっている動物への愛が打ち勝ったのである。しかしこの両方の愛を両方とも打ち勝たせることは自分にはどうしてもできない。しかもこの両方の愛を両方とも完全に満足させたいのが自分の愛の要求である。これができなければ、自分の愛は全体として満足できない。愛が完全に満足されない限り、鋭き良心をもつものはその良心に痛みを感ずる……

「またこうした場合はどうしたらいいであろうか。たとえばここに食に餓えて死にかかっている一人の病める貧しき旅人があるとする。それを見つけた自分はかれを救いたいところの愛の念願に燃える。しかし自分は貧しくして彼を救う資

料をもたないのである。自分は、それゆえかれを救うように両親または他の人に彼の窮状をうったえたとする。この場合、両親または他の人が愛深き人であって、自分のうったえに応じて彼を救ってくれれば問題は起こらない。しかし仮にこの時両親または他の人がことごとくその貧しき行路病者を救うことを断ったとするならば、救いのための資料をもたない自分はどうしたらいいであろうか。この時、常に金銭や物質に恋々としていないことを名誉としている清貧の自分に、その清貧の無能力さを人々こぞって嘲笑さえするならば、自分ははたしてどうしたらいいであろうか。自分は救いたい念願を放棄して、拱手してその貧しき行路病者を死の手にわたさなければならないのであるか。かかる場合、自分は今までこう考えることによって諦めに到達していた――摂理が彼の死ぬることを要求しているのである。この場合、彼が生きんと欲することも『私』であり、彼を救おうと思うことも『私』であると。しかしはたして自分は『摂理』の名にかくれて自分の清貧の無能力さをごまかそうとはしていなかったであろうか。ここに自分は峻厳なる反省を必要とするのである。

「考えようによっては、この貧しき行路病者が路傍に倒れて瀕死の不幸に出会さねばならなかったのは、行路病者自身の不徳の報いであるかもしれない。彼は善事をなしうる時に善事をなさず、これまでつねに悪報を受けねばならぬような悪業のみを行なってきていたのであるかもしれない。もしからば彼はその報いを背負わねばならない。甘んじてその報いに堪えることによってのみその不徳と悪因とは償われるのである……われらは彼をその不幸より救わんとする甘き『同情を超克』して負うべき者にその不幸を負わしめねばならない。……しかし自分としてはこのごろ、ある不幸がその人にとって当然負担すべきはずの不幸であるや否やということについて明らかに第三者が判断を下しうるという自信はない。たとえば前述せる行路病者が救わるることをえないのは、行路病者自身の当然受くべき悪報のためであるか、自分の救う力の欠乏のためであるかを自分はハッキリとは知りえない。……自分は五年ばかりのあいだある宗教団体（皇道大本を指す）に属して生活してきたことがある。その教団では各人一切の不幸を、各人の業因の流転であるとみなしている。ある時その教団へ一人の肺をやめる患者が修行するために来た。宿舎は修行者たちで一杯であったが、この病修行者を宿舎に収容することについて教団の役員たちの意見は二派にわかれたのである。その一派は『自分の業因流転は自分のみで背負わねばならない。それゆえ肺を病める修行者は他の修行者に遠慮して宿舎に泊ることはならない』というのであった。他の一派は『かかる冷酷な処置は神の愛の御旨ではない』と主張するのであった。しばし論争の末ついにその人の不幸はその人だけで背負わねばならぬ、他人に迷惑をかけてはならないということに一決されてその人は宿舎に泊ることを断られたのであった。自分はその泊ることを断られた病人が、その時どんな感想を抱いて教団の宿舎を去つたかは知らない。その人が強い人ならば、そして宗教的意識強き人ならば、そんな虐遇を、自己の罪障に対する贖いとして、感謝し忍受して去ったであろう。しかし彼が弱い人ならば、必ずやその教団の処置を恨みに思って去つたであろうと思う。自分はその

時傍で聞いていたが、言葉を容れる位置ではなかったので黙っていた。そして心の中ではその病修行者をかわいそうに思ったが、また『あるべきことがあったのだ』という知的な認識が、その同情に打ち克ってしまったのだった。

「自分にはこうした全体を静観した知的な認識が、多くの実際問題において、甘い同情に打ち勝ってしまうのが常である。天性あまりに同情深き人にとっては、同情を超克して、あるべき物をあるべき所にあらしめんと努力することが人格の強さを鍛える一つの課題ともなるであろうが自分のごとく静観が常に同情に打ち勝ちがちな性格においては、同情が常に克服されていることがかえって一つの弱さなのである。自分が常に愛を説き、同情の徳を称え、殺生を愛なき行為なりと観じ、行為をその殺生観に従わしめようと努力しているのは、その弱さを充塡せんとする自然的な衝動であるとも考えられる。自分の人格の弱さは愛が脆弱であって理知に征服されやすきところにある。したがって、自分には、自分が他を救いえないあらゆる場合を通じて『負うべきはずの者が不幸を負っているのだ』と知的に解決してしまうことがかえって一つの誘惑となるのである。それゆえ、自分は摂理に不幸者の責任を負わしてはならない。自分は強いても、自分の目に触れる不幸者を救いえないのは自分の愛の不足と力の不足であると、その責めを自分一人に負い切ることによって人格の大と強さとを増しうるのである。しかして、今自分の愛の不足は『愛せんと努力する』精神的努力によってしだいに補足し、愛の大をきたし得つつあるのを感ずる。しかし愛を実に移す力は、かかる純粋に精神的なる努力のみをもってしてはなお得られないのである。愛の力が大となるにつれて、自分は愛を実に移す力の欠乏をいちじるしく感ずる、特に愛を実に移す経済的実力の欠乏――清貧の無能力状態を感ずる。この力の欠乏を、人間の能力のこれきりの限界だと観じ、救うことが聖旨でないと観じて、その力を獲得することに努力しない時自分はこれを退転だと思う。自分はこの清貧の無能力状態から脱却しなければならない。……できうる限り財貨を他から奪いとろうと、鵜の目、鷹の目でいる人ばかりのこの世界に、自分のような態度でいる者が貧乏しないことはありえない。白分ははたして貧乏のどん底におちいったし、たとえば、自分の一人の子供の教養のために今いる環境が至極おもしろくないものであるにかかわらずその環境を脱することの能わざるほどに経済的に無能力になってしまったのである。一人の子供を教養することは決して『私』の問題ではない。それは『公』の問題である。この『公』なる問題に自分が十分力をつくすことができないのは経済的に不如意だからである。この経済的の不如意は、自分が敢えて要求してもいいはずの財を敢えて要求しないところの自分の『勇気の無さ』から来たのである。敢えて要求してもよい財を要求することは罪悪ではない。自分は今まで自分が財を要求せんとする場合に感ずる子供らしい羞恥を、敢えて『財に捉われぬ』自分の人格の『高貴さ』から来たものだと矜りに思っていた。しかしその実この羞恥は自分の人格の『弱さ』から来るのであった。真に『財に捉われぬ』人格は、財を捨離するも要求するも共に無擬自在であって矜持をも感ぜねば羞恥をも感ぜぬごとき人格でなければならない。自分が財を要求せんと欲し

て感ずる羞恥は、自分が財に捉われている証拠なのである。自分はこの羞恥を克服しなければならない。羞恥は『高貴』のしるしではなく、『弱さ』のしるしである。羞恥は全然麻痺した人格においても感じられないが、麻痺せざる弱き人格の徴候でもある。強き自在無擬なる人格は羞恥を感ぜざるものでなければならない。自分はこの自在境を理想としなければならない。必要に従って自在無擬に要求し、要求するに従っていっさいのものが集まり来り、しかもその集まりきたれるものに着せず執せざる自在境に到達しなければならない。みずから好んで狭隘なる『清貧道』よりほかに歩むべき道なしと限るのは、自分の人格を狭めかつ小さくする道にほかならない。自分は今まで自分の人格完成の理想を『汚れざる聖境』においたが、汚れることを惧れるごときは、まだ真の大自在境ではない。これは洗礼ヨハネの境地である。ヨハネは謙りて、罪びとともに飲食するキリストの靴の紐を結ばねばならない。自分は汚れることを惧るるごとき憂惧をさえ超越しなければならない。これを超越することによってのみ、真の大自在境に達するをうるのである。『まず世を離れて法に着き、さらに法に着くことをも離れる』に及んで真の大自在に到達する。およそ真に、悪とは自在ならざることの異名でなければならない。たとえば一燈園において衣服を黒き筒袖のみに限りて奉仕するのは世を離れたる相である。しかし仮に一燈園の同人が『黒い筒袖のほかには一切奉仕の服はない』と四角四面に狭くるしく自分を限るならば、それは一つの『凝り』となる。『凝り』は自在の凝滞であるから超越されなければならない。またたとえば、殺生を罪悪なりと観じて、肉食を禁断するごときは浮き世の欲望を離れたる相である。しかし恵まれたる肉を歓んで受けること能わざるごときは一つの凝りである。『凝り』は自在の凝滞であるから超越されなければならない。しかしてその恵まれたる肉を歓んで受けかつ食べ、相手の供養の心を生かすと共に自分の肉体をも養い生かし、供養を旋すものと受ける者との調和した感謝の心をもってその供養の『犠牲』をも生かす時、はじめてこの『凝り』は解けるのである。自分はかつて、供養されたる肉類をも受けざるをもってよしとしたが、今の自分のごとき境地にては受けるをもってよしとする。およそ真に自在なるものはすべてを生かすのである。物欲にとらわれて自在を失った浮き世の人が、清貧の生活に入るのは、物欲の束縛を脱して自在とならんためである。しかも清貧に凝りかたまりて、すべてのものを生かすことができなくなる時、その人は清貧のためにかえって自在を失ったのである。自分は再びすべてのものを生かすために要求すべきいっさいを、なんのこだわりもなく要求しうる人格の強さと、殺生してなおそれを生かしうる人格の自在さと、思うままに方便知を駆使して敢えて真実にのみとらわれざる人格の無罣礙さと――これらを獲得せんがために峻峭なる『義』のみの高地を将に降りて無擬の大平原にのぞまんとする真に真面目なる転機に[illegible]しているのである。……」

この転機の論文を書いたのは大正十三年四月十七日である。

六

その書の著者、ホルムズは言う。「神は超個性的な創造の法則であって、創造になんら自己自身の偏向をもっていない。」「なぜ善人が不幸であり、悪人が幸福に見えるような世相が存在するのであるか。」この問いに対してホルムズは「善人にせよ、悪人にせよ、自己の不幸を心に描いてそれを心から離すことのできないものは、不幸に陥らずにはいられない。その不幸は自分の心が呼ぶのである。宇宙の法則は心の呼ぶところのものを造り出してくれるのである。結局(つま)り、三界は唯心の所現である。不幸が来ることがいやであれば、不幸の存在を意識の圏外に逐(お)い出しさえすればいいのである。神は吾人(ごじん)の不幸について責任をもっていない。神はただわれらに思考の自由を与えて、その思考するとおりのものをわれらに与えてくれるのである」と答えている。「不幸の存在の思考が、不幸の原因であるならば、なにゆえ神は人間から不幸の存在を思考する自由を奪ってしまわないのであるか。」この問いに対してはこう答えている――「神は自由を奪うことを喜ばない、それは人間を『自由人』とするのではなく、『機械人』としてしまうことである。『人間よ、お前の意識はこれだけきり考えることはできない』といって人間の意識からいっさいの不幸の原因である不幸の意識を奪ってしまうことは、神がもししようと思えばできたであろう。それをしないのは、自由を奪うのはあらゆる不幸よりもなお大なる不幸であることを神は知っていたからである」と。

ホルムズの思考に従えば神はいっさいの「造り主」であるが、神は決して勝手気儘(きまま)にわれらに不幸を造っているのではないのである。われらの思考するところのものを病気であろうと、貧乏であろうと、逆境であろうと、順境であろうと、不幸であろうと、幸福であろうと、われらの思考を鋳型として無差別平等に神はわれらに造り与えてくれるというのである。そこに人間の自由と、神の当体の無相にして応現の自在なることが確保されているのであった。それは仏教的思想に融合したキリスト教思想であって、キリスト教的「造り主」をありとしながら仏教の「無明縁起」と一致しているのであった。「造り主」の思想と、「無明縁起」とは一致しがたいものとして、ひとたび造り主を否定してしまったわたしは、ここに再び創造主(そうぞうしゅ)を発見したのであった。

しかし、わたしがいったん創造主(そうぞうしゅ)を否定し去った後にホルムズの哲学が肯定してくれたこの神なるものは、まだ現在の生長の家が説いているような実相の神ではなかった。それは現象界を創造する神であった。それはわれわれが心に描いたものを、その心に描いたとおりの形に現象界を造り出してくれるところの現象界の創造者であった。わたしは、『聖道へ』なる論文集において、現象界の創造者は「神」ではない「無明」であるとし、この世界は「無明」が造ったのであると説いたが、ホルムズは、「無明」を創造主としないで、「無明」は創造主の前に投げ出されたところの創造の雛型であって、応現自在の無相の神が、その「無明」を雛形(ひながた)として、現象界を創造してくれるというのであった。ここに、創造主と無明とは断然区別せられることになった。創造主はただ創造(つく)るエネルギーとせられた。そのエネルギーを指導するものは人間自身の念であるのであって、現象界創造の機械工場において創造主は発動機の動力みたいなものであった。その動力を指

導し操縦して旋盤を操り、穿孔機(せんこうき)をあやつりできふできを作るのは人間自身であった。

生命の實相　谷口雅春　日本教分社